

高齢者のみの島志々島

木村良夫

1 はじめに

志々島は、香川県三豊市詫間町に属する島で面積 0.71 平方キロの小さな島である。栗島の東に位置し、昭和 30 年までは栗島、両島で栗島村を構成していたが、漁業を主産業としてきた島で、「船員の島」栗島とは違う独自の歴史を歩んできた。

昭和 30 年（1950 年）850 人いた人口は、減少を重ね、2005 年（4 月 1 日住民登録数）28 人にまで減少した。私たちが調査に訪れた 2005 年 8 月において、最年少者が 63 歳で、この一人を除くと他の住民はすべて 65 歳以上ということであった。まさに、高齢者のみの島である。しかも多くがひとり暮らしである。ここでは、このような激しい人口の減少が起こった経過を明らかにするとともに、現在の超高齢社会となった島の住民の生活がどのようにして成り立っているのかを考察する。

2 人口の変遷

年代	戸数	人口
文化 5 年	129	561
文化 12 年	125	(550)
文政 3 年	132	(600)
天保	133	673
明治 4 年	155	754
明治 35 年	180	(810)
昭和 21 年	(200)	(1000)
昭和 30 年	191	850
昭和 35 年	188	683
昭和 40 年	174	602
昭和 45 年	158	413
昭和 50 年	117	194
昭和 55 年	100	163
昭和 58 年	94	141

()内は推定

志々島の戸数と人口の推移を「志々島の話」より抜き出したのが上の表である。

これを見ると、志々島は江戸時代から漁業の島としてかなりの人口を持っていた。それ

が徐々に増え、明治初期で 700 名を超え、明治の終わりには 800 名以上になったようである。第 2 次大戦の後には人口は一時 1000 名程度まで達したが、その後減少を重ねている。特に大きく人口が減ったのは 1970(昭和 45)年から 1975 (昭和 50) 年にかけてでありこの 5 年間に人口が半数以下に減っている。

この 1970(昭和 45)年から 1975 (昭和 50) 年にかけての激しい人口減少がどのような形で起こったか明確に分かる資料はないが、離島統計年報昭和 46 年版と昭和 51 年版から農業関係の統計を拾ってみると

年次	総面積	耕地面積	耕地化率	農家数		
				総数	専業	兼業
1970 年	71ha	36ha	50.7%	119	38	81
1975 年	74ha	11ha	14.9%	96	40	56

となる。農家数は余り変わらないが、耕地化率の大幅な減少が見られる。

聞き取り調査をしたときに、転出した住民の多くは多度津に移り、詫間に移った者より多かったと聞いた。志々島はもともと多度津との関係が深く、連絡船も粟島—多度津を結んでいた。魚や農産物の出荷と買い物を主に多度津で行っていたと思われる。昭和 30 年の町村合併で詫間町に編入されるが、詫間への交通の便は悪い状態が続いた。志々島—詫間宮の下間の航路が開設されたのが昭和 42 年である。

1970 年の志々島小中学校の生徒数は小学生 35 名、中学生 16 名の計 51 名であったが、1971 年に中学校がなくなり生徒は寮に入り詫間中学校に通うことになった。1975 年には、小学生がいなくなり小学校が休校（実質廃止）になっている。これに先立つ 1973 年に幼稚園が廃止になっており、1975 年 4 月をもって志々島に学校はなくなった。

これは、総人口が 194 名に急減し 200 名を切ったということ以上に重要な意味を持っていた。それは、子育て世代がほとんど島から姿を消したということであった。1975 年国勢調査時の年齢別人口のデータがないので 1975 年時点で子育て世帯がいなくなったとは断定は出来ないが、1980 年国勢調査時の年齢別人口を見ると、19 歳以下なし、20-24 歳 1 名、25-29 歳 1 名、30-34 歳 2 名、35-39 歳 7 名になっている。さらに、1985 年国勢調査では 39 歳以下の人口が 0 となっており、この時点では人口を再生産する能力が完全に失われたと考えられる。

学校の閉鎖と人口減について、島の人口減少の大きな要因の一つとして学校の閉鎖をあげるむきもある。中学校の閉鎖に関しては、住民の反対が強く集会なども行われた。行政側も寮を建設してまで廃校にするなど強引な感じはあるが、基本的な流れは、人口特に子育て世代の人口が減少し、子供の数が少なくなっていく中で学校が廃止されたのであって、その逆ではない。もちろん学校の廃止が更なる人口の流出を加速させた面はあったろう。

その後の人口の変遷を詫間町作成の「4 月 1 日現在の人口」から紹介する。1980 (昭和 55) 年の人口が先の表を比べかなり違うのは、先の表が 1980 年の国勢調査によるも

のであり、町の資料は 1975 年国勢調査と住民台帳を基にしているためである。

これを見ると、1995 年以降の減少率の大きさが目に付く。

年次	人口
1980	130
1985	127
1990	91
1995	72
2000	47
2005	28

3 経済基盤の衰退

① 漁業

人口の減少は地域を支えてきた産業が衰退して起こる。志々島の主な産業は、漁業と農業であった。その中でも漁業の方が主であった。

「志々島の話」の中に次のような記述がある (P76-P77)。

『瀬戸内海の一隅に浮ぶ志々島は両積僅か五十八町歩。特産物もなく観光資源もない。耕地は傾斜畑で水田もない。当然島の主産業は漁業であった。幸いにして近海は潮流、水深、水温等、魚類の産卵、生育の条件に恵まれ、魚漁は盛んで島の繁栄をもたらした。明治初年までは広範な漁場を一手にして、島はシバリ網の本拠地となり近在から多くの出稼者も集まって「金のなる島」と称された。

当時この島だけで七〜八統のシバリ網元があり、一統で八十人程度の人手を要するので、この漁だけで五〜六百人の人手を必要としたのである。

やがて大正年中には朝鮮まで出漁、一日数万貫の水揚げがあったと言われるが、当時朝鮮にはコレラが大流行し、折角の漁獲物も現地で焼却せざるを得ない状態となり、散々な目にあったと言う。その後シバリ網は衰退したが、小規模ながら比較的順当な漁獲を得ていた。

第二次大戦後、経済の成長と共に、安定した収入を求めて離島する者が増加、更に各地での海岸埋立、海水汚染、漁法の変化等によって漁獲が減少し、離島に拍車をかけ、過疎、老令化が進んだ。

現在では、僅かな人が零細な漁法を営んで、あの繁栄を極めたシバリ漁も今では語り伝える人さえ稀となったのである。』

ここに出てくるシバリ漁は、「鯛・サワラ等取る沖合い漁業で昭和のはじめ頃まで豊漁であった」という (昭和 46 年発行「詫間町史」p517)。また、朝鮮への出漁については、『明治 18 年ごろ志々島の 3 網元がはじめて朝鮮に出漁して好成績をあげたので毎年漁期には玄海の荒海をけて出漁した。』と記されている (昭和 46 年発行「詫間町史」p517-518)。

第 2 次大戦後については次のような記述がある (「志々島の話」)。

『 詫間町の水産業の推移

詫間の海はいい漁場であったが、大戦後の乱獲で魚類の減少を招き、漁業従事者は養殖漁業に取り組み始めていた。昭和 30（1955）年ごろ粟島を中心にカキの養殖が開始された。また、昭和 30 年代後半からノリの養殖も始まった。その後、養殖はこの海域の水産業の中心となっている。志々島の漁民はこういった流れに乗れなかった。』

つぎの表は離島統計年報から、志々島とその近隣の島の 1975 年と 1990 年の漁業関係の統計を抜き出したものである。

1975 年	漁船数(隻)	水揚高計(万円)
佐柳島	67	4497
高見島	73	14903
粟島	140	26350
志々島	111	12137

1990 年	漁船数(隻)	水揚高計(万円)	海面漁業	海面養殖業
佐柳島	52	6900	6900	0
高見島	93	107900	65300	42600
粟島	148	46600	7300	39300
志々島	47	5300	3500	1800

志々島の水産業の生産額は、近隣の島が増加している中で減少していることが分かる。にもかかわらず、農業関係の生産額は、1975 年で 3530 万（昭和 51 年版離島統計年報）となっており、漁業の 1 億 2 千万余に遠く及ばない。主産業の漁業が衰退し島の経済基盤を弱めたことが、人口減少の最大の原因であったと思われる。

②農業

農業についても、さまざまな努力がなされてきた。その一端が、「志々島の話」の中にまとめられている（P66-P69）。

『志々島の面積は狭小であるが、勤勉な島民が耕した天に至る畠は全島面積の約六十六%を占めていた。（略）

農産物は小麦、大麦、甘藷、唐辛子、除虫菊等が主として作られたが、産業の主流はやはり漁業によって占められていた。

其後食糧事情の好転や、減反政策によって新しい農業への転換にせまられた。

昭和三十年頃、隅田志津夫、高島実、高島藤松の三氏が岡山県真鍋島の花弁栽培を視察してこれを導入した。隅田氏はキンセンカの種を大阪方面から購入、福本藤松、高島実、同藤松の三氏が小豆島から菊の株を入手して栽培を始めた。

やがて花卉生産出荷組合を結成（当時組合員十五名）したが、其後個人出荷の増加にともない昭和三十六年頃、出荷組合は解散され、農協に吸収された。

花の栽培は島の全農家に拡大、麦、芋に替る農作物の主流となった。

昭和四十年頃には二千万円近い水揚げを得たが、競争の激化、耕地不足、水不足、老令化の悪循環からその前途は不安に包まれている。』

以上の記述からも分かるように、農業においてもさまざまな努力がなされてきたが、全体としては衰退の一途をたどってきた。

③詫間町における産業の転換とその影響

詫間町の基幹産業は製塩業であった。志々島の対岸の三野津湾岸には入浜式塩田が広がっていた。この光景が 1955（昭和 30）年を境に変わる。まず、流下式塩田に切り替える工事が始まり、松崎塩田が廃止になる。さらに、イオン交換樹脂膜による製塩法の実用化により塩田が不要になり、1972 年を最後に詫間町の塩田はすべて廃止になった。

このような状況の中で、町は三野津湾の浅瀬を埋め立て土地を造成するとともに、港湾の整備を行い、工場を誘致した。詫間港が開港指定を受けたのが 1970 年である。

これが、海の汚濁や藻場の喪失の一因となり、志々島の漁業の不振に連なつたと考えられる。

2005 年 11 月 11 日詫間町役場において、当時の助役詫間さん（70 代後半、40-52 歳の間 12 年間詫間町の助役をする）に話を聞いた。この頃町としては塩田跡の開発に忙しく、志々島で過疎化が深刻化しているとの認識はほとんどなかったということであったが、今から考えてみると

1970 年代前半の志々島の人口流出の原因として、

- ①戦後の魚の取りすぎと産卵場所の埋め立てによって漁業が衰退した。
 - ②高度成長・所得倍増の時代で他に職を求めることができた。
 - ③島からの通勤通学ができない不便さから島外に転出する者が出てきた。
- の 3 点があげられるのではないかわれ、また、
- ④多度津方面 70 戸以上、詫間へ 30 戸移住の話聞いたことがある。
- と付け加えられた。

当時の詫間町について何うと、詫間町海岸部の塩田（会社の所有）が次々と廃止になり、そこが宅地やゴルフ場になっていった時期で、港の整備をすすめながら、埋め立てを行って工場誘致をしていた。北米から丸太材を輸入し貯木して、角材に加工していた。（なお、現在は、加工されて入るものが多いので稼働率が低い。）今も優良企業が多く税収も上がっているという。

注 1) 1993（平成 5）年 7 月多度津—志々島間の航路 2 往復が廃止になる。

注 2) 1970（昭和 45）年：詫間町水面貯木場完成

注 3) 塩とたばこが作られていたことから専売公社の事務所が町役場の横にあった。

4 生活基盤の整備

通信 1957年、詫間町全域に有線放送電話が開通した。それが、完全にダイヤル化された公社電話に変わったのは1974年である。郵便については、毎日集配が行われており、農協の支所が簡易郵便局を兼ねている。

水道 これに対して、簡易水道はかなり遅れる。1986年粟島から海底送水管で水道水を供給する形で実現した。(当時の人口は既に121人まで減少していた。)

道路整備 車が通れる道路は、港の周辺に数十メートルあるだけである。

詫間町の支所、農協の支所、漁協の支所がある。さらに、町の診療所があり、町の医師が週1回、看護婦が週3回来ている。雑貨屋さん1軒。

連絡船は、詫間町宮之下との間に日に3便運航させている。

5 島民の生活を支えるもの

水道、電気、ガス(プロパンであるが)の「ライフライン」は1986年以降そろそろことになる。また、簡易郵便局、町立の診療所、役場支所、雑貨屋もある。もちろん、それらは十分でないために住民は連絡船または個人の船を使って詫間町に買い物や診療、散髪のために出かける。

島には、随時ボランティアが訪れ、道の草引き(特に大楠までの道)、寿司を食べる会、神社の行事などを手伝っている。公衆トイレ、寺、神社の掃除などは島民が行っている。

公的なサポートと島民自身の共同の努力と島外のボランティアによる活動で、高齢者ばかりの島が維持されているわけである。さらに、個々の島民の生活を維持するという点では、近くに住む子供が生鮮食料品を持って訪問して家事を行ってくれることが重要な支えになっている場合もある。

6 おわりに

一時人口千人を擁した志々島の人口も今では30名を切り、そのほとんどすべてが高齢者ばかりとなってしまった。もともと漁業を主産業としてきた島にとって漁業の衰退は生産年齢人口の流出を招き、島の人口再生産能力を奪ってしまった。これが、だいたい1975年のことであり、その後年月の経過と共に高齢者のみが住む島が出現した。公的な支援と住民およびその親族の努力でなんとか住民の日々の暮らしは維持されているが、新しい転入者がいない状況であり、いつまで有人島のままでいられるかははなはだ心もとない。

なお、詫間町は私たちの調査中、2006年1月に三豊市の一地域となった。そのために、記述に統一しないところがある。

参考文献

上田勝見、阿部日吉著、『瀬戸内海志々島の話』、讃文社印書館、昭和59年2月1日発行